北大PRISM-HU事業で豪メルボルン大学医学と連携

北大と豪州メルボルン大学は、半世紀以上、微生物学・感染症の分野で継続的な連携を行っており、令和3年度年末からは戦略的国際パートナーとして、保健科学、社会医学の分野での研究教育連携を図ってきました。令和7年4月に田中伸哉医学研究院長が同学を訪問したのをきっかけに、両校の医学研究での連携を進めるべく、日本医療研究開発機構（AMED）採択事業「ひと・AI/DX・しくみの三位一体的整備による次世代AI活用駆動・情報循環型医学研究（PRISM-HU）」では、海外連携先として同学を指定しています。本事業は、地方医療を維持しながら「真の研究時間」創出を目指すため、専門人材と制度開発、業務効率化と研究高度化のためのAI/DX活用を掲げており、AIを医学研究に活用する若手・中堅研究者12名を主任研究者（PI）に据えています。

2月19日（木）・20日（金）には、メルボルン大学医学・歯学・保健科学研究院を同事業PIである先端生命科学研究院の中岡慎治教授（数理生物学）、医学研究院の田中　努助教（がん免疫）、小田義崇助教（腫瘍病理）に加えて、北大病院の渡邊史郎助教（核医学）、医学院博士課程学生の韓　豊氏、国際連携推進本部の植村妙菜学術主任専門職の計6名が訪問し、同研究院執行部にPRISM-HUを紹介し、今後の分子・基礎医学研究、ビッグデータ・オミックス研究での連携可能性について打ち合わせを行いました。メルボルン大学からは、マギー・ダンシャン准研究院長（国際）、サラース・ランガナサン医学院長、フレデリック・ホランド副医学院長、ブルース・トンプソン保健科学院長、アンナ・ライアン医学教育学科長、クリストベル・サンダース教授がホストとなり、中岡教授からの北大がPRISM-HUで目指す「北大モデル」の説明、また、田中助教、小田助教、渡邊助教からの研究プロジェクトの紹介に耳を傾けました。

ランガナサン医学院長からは「工学・医学団地の連携については、あくまでも医理工学というような限られた分野になっていたのが現状で、研究者個々人の動き次第であった。AI活用に関心のある研究者を北大と一緒に繋げられれば。インフラ整備として『北大モデル』の実情を学びたい」、ダンシャン准研究院長からは「本年後半に、AI活用希望研究者を含んだ訪問団派遣を調整できれば」との希望が示されました。また、医学研究推進の任にあるサンダース教授からは、乳がん、前立腺がん、メラノーマに代表されるがん研究、感染・免疫、小児医療、心血管系、神経科学・メンタルヘルス分野でのメルボルン大学の強みが紹介されました。

一行は、ホランド研究室、ピーター・マッカラムがんセンター、生物学・数理学・統計学の融合イニシアチブであるメルボルン統合ゲノミクス（MIG）、工学・情報技術研究院、ピーター・ドハティ感染免疫研究所の研究者らとの打ち合わせを行ったほか、ハリー・ブルックス・アレン解剖・病理学博物館、先住民のブッシュ・メディスン（薬草療法）と西洋薬学の展示を行う医学史博物館、医学系スタートアップ企業やヘルスケアシステムの実装実験を行うスペースが集まるメルボルン・コネクトを見学し、2日間の充実した訪問を終えました。

（医学研究院、国際連携推進本部）



メルボルン大学医学・歯学・保健科学研究院執行部と本学一行



解剖・病理博物館前にて



ホランド副医学院長の案内を受ける一行